

厚和の塔と寺

村 田 治 郎

目 次

- 一、萬部華嚴經塔……………現状と創建年代
- 二、慈燈寺（五塔寺）……………寺と所謂五塔
- 三、延 壽 寺……………寺の現状略記

茲に記さうとする諸建築は、ボズドネエフ氏の「蒙古と蒙古人」^①で外観だけは早くから知つてゐたのであるが、平面圖がなくては十分理解出来難いのである。是非一見したいと思ひ乍ら果さないでゐたところ、漸く昨夏古建築行脚に出かける機に恵まれ、九月八日、九日の兩日、羽田、原田兩先生のお伴をして、蒙古自治聯盟政府當局者の御盡力の下に、極めて氣樂に瞥見する喜びを得たのであつた。しかし正味一日の間に厚和附近の主要な古蹟を一巡したのであるから、單に見たといふに止まり甚だ不十分と思つたので、包頭からの歸途、

羽田先生一行とお別れして再び厚和驛に下車、歸化城内の喇嘛寺から特に二寺を選んで主要部の平面圖を作つたのであるが、この選擇は建築的に特色のあるものを目標にした爲に、歴史的に一層重要であるらしい無量寺（俗名大招）^②を除くことになつて了つたのは残念であつた。尙ほ平面圖を作る時に各殿の内部まで十分調査をする餘裕がなかつたので、寺の平面圖が單に建築配置圖に過ぎない點や、すべての記述が表面的に止まつた事をも御斷りせざるを得ない。

① A. Pozdnev, Mongolia i Mongoli. Tom II (Ireesh is 33) いふまでもなく一八九二—三年の旅行記で、早く東亞同文會譯補「東部蒙古」(大正四年)が刊行されたが、後者には原著の寫眞版を採り入れなかつたので建築などに關しては不便である。これとは別の話であるが、大連の亞東印畫協會の撮影技師が十年許前に綏遠・包頭・五原

地方に行つたことがあるので、その寫眞を通じて私は此の地方の建築の姿だけは知つてゐたのである。尤もそれには萬部華嚴經塔はなかつたが。

尙ほ東亞考古學會蒙古調査班著「蒙古高原橫斷記」(昭和十二年刊)にこの喇嘛寺の寫眞及び記事があつて參考になる。

② 綏蒙 卷八、古蹟考 無量寺在城南門里許、俗名大招、明崇禎中、清郡統古祿格楚琬爾、奉諭、委左翼佐領補音圖繞騎喇巴太、與德木齊溫布喇嘛協同、將原寺展大、賜名無量、康熙三十六年、經札薩克達喇嘛納依齊託音呼圖克圖、奏請嚴易黃瓦。山西通志光緒本、卷五七には崇德中建などゝあつて少し違ふ。この寺が萬曆七年秋、俺答が寺額を請うて弘慈寺の名を賜つた(明史紀事本末卷六〇)といふ寺にまで溯り得るかと思ふ。私は寺を一瞥して少し撮影したのみであるが、建築は餘り特異性なく全くの支那系であつた。

一、萬部華嚴經塔

厚和驛の東方十八軒なる白塔站(今は停車場)の南に當り畑の中に遠く逆光で見えるのが萬部華嚴經塔である。

厚和新城からは自動車で片道約五十分を要する距離にあるが、しかし道路が更によくなれば此の時間が短縮されることは勿論である。

塔は八角七層の軀、基壇の一邊約六米六十糎、高さ約四十四米(百四十五尺)位であらう。尤も今では頂上の屋根が壞れて了つて、小石か又は軀の破片らしいものを積み重ねて低く圓錐狀の屋根をつくり、相輪も全く喪失してゐる状態だから、嘗て完備してゐた時に比べて可なり低くなつてゐるのは推察に難くない。

外形は北支より滿洲へかけての地域に多い遼金系の佛塔と些か異る。遼金系佛塔は八角多層で第二層以上が高さを急に減じて、屋根のみを積み重ねた外觀を呈し、各層に窓がなく、内部へ入ることも上層へ昇ることも出来ないものであるが、此の塔は第二層以上も初層と同様に高く且つ窓があり、内部に入り階段によつて上層まで上ることが出来る。斯る點は中支以南に多い宋系ともいふべき佛塔に似てゐるのであるが、しかし各層の外壁一面に彫刻を施してゐる點で宋系佛塔と明かに區別が出来、結局獨自の形式を示す一系統と見なすべき塔である。而も同じ系統に屬する遺例は、僅かに興安西省の西北境なる白塔子(チヤグンボタルガン、遼の遼州城附近)の軀塔が知られてゐる位で、極めて少數であるらしい點にも此の塔の重要さがある。

塔の細部について少しく記して見よう。高さ四米以上に及ぶ基壇には少なからぬ修補が加へられて居り、その手法が極く近年のものであるから、塔の南方に稍々離れて立つ民國十□年十一月の重修碑が物語る重修とは恐らく此の基壇に於けるものに止まるらしい。

修補は初層以上に認められず、屋頂の如きは十九世紀末に於けるボズドネフ氏の寫真と殆んど同じ狀態だからである。而もその修補が可なり改惡であつて、昔の特徵ある部分を除いて不明にした點が少からず眼につく。

それでも基壇の最上部に於ける三層の大蓮瓣（即ち蓮座）とその下にある高欄の部分が、或る程度まで残されたのは嬉しく、高欄の下 の腰組は恐らく第二層のそれと同じく二手先であつたと見られる。腰組よりも下部については全く知るすべがなかつた。

外壁に浮彫を多くつけてゐるのは初層と第二層とで第三層以上は單に窓又は扉などの建築的表現をしてゐるに過ぎない。初層の彫刻には三態あり、第一はアーチの出入口の左右に武器を持つ天王の立像、これは南面と北面とである。南面アーチの上に萬部・華嚴・經

塔と二字宛三行に刻んだ石額をはめてゐるが、その周圍の漆喰が新しく近年の重修の時に手を入れたらしい。第二は矩形の豎格子窓の左右に立つ菩薩立像、窓の上部に小さな佛坐像があるもので、東南、西南などの斜の面に見える。第三は二枚の棧唐戸を閉した出入口の形の左右に天王の立像、その上部に豎格子を入れた小さな明り探りの窓があり、これは東と西との二面。八つの隅にある圓柱には龍が巻きついてゐたらしいが、今では殆んど全部姿を消してゐる。

第二層の彫刻は一層完全に残り、柱の龍がはつきり判る。壁面浮彫は初層と殆んど同様であるが、只位置が少し變つて、初層のアーチの部分と二枚扉の部分とが第二層では入れ換り、南北面が扉、東西面がアーチである。さうして東南などの斜の面は第二、第三層以上も初層と同じく豎格子の窓であるが、第二層では窓の上の坐佛小像を缺き、第三層以上では菩薩像までなくなる位の差異がある。尙ほ二枚扉は第二層以上では所謂板唐戸となり、同時代に二種の扉があつたことを示してゐる。

第三層以上には人像的彫刻がなく、柱形を以て壁面

を縦に三つ割りにし、中央の柱間の廣い部分にアーチや窓を入れる。さうしてアーチと二枚扉との配置は、第三層が初層、第四層が第二層と同じといふやうに、一層置きに同じものを繰り返してゐるに過ぎないが、一見したところでは壁面の變化が多くて可なり複雑な印象を與へる。第三層以上の總ての柱が面取の角柱になつてゐるのも注意したい。

各層の屋根が壞れ落ちて了つたことは言ふまでもないが、同時に各層には高欄(恐らく木造?)があつた點をも見逃がすべきでなからう。屋根を支へる斗拱の方にもまた斗拱の層が見えるのは高欄の腰組である。屋根と高欄との二者が壁面より少し突出してゐたことと屋頂の相輪とを加へて初めて全體の姿の想像が出來上る。^①しかし此の種の八角塔の輪郭線は、日本の佛塔のやうな輕快性に乏しく、甚だ鈍重でスツキリした味ひが缺けてゐるのは事實である。

塔の建築年代を明確に示す文獻を私は知らない。しかし塔の全形及び細部の示す様式によつて年代を推定すれば、遼代末期までは溯り得るものゝやうである。尤も様式なるものは現在の表面的性質のみを基準にす

るから、若し根本的大重修によつて外貌が一變したやうな場合には、その重修年代のみを判定して遂に創建年代を求め得ないことがあるのは勿論である。

様式的特徴を多少摘記しよう。第一は斗拱の特徴、肘木下端の凸曲線が數個の直線又は凹曲線より成ること、第二層と第四層との中央に斜め斗拱を用ゐること及び斗拱の上部に下が水平、上が斜めに切り去られて先端が三角狀になつた一種の傘鼻狀の材を載せてゐること等が擧げられる。基壇の高欄に於ける雷文系の組子と斗束の瓢箪形曲線も注意すべく、附近に落ちてゐる甃の破片に見る繩目の線の如きも金代まで降らないやうである。柱と斗拱との中間に臺輪を挿入してゐるのは、西紀十一世紀初頭以後位からの様式らしく察せしめ、外壁の諸彫刻に豐麗さを缺ぎ些か乾からびた趣きのあるのも、遼末以前には遡るべきでないらしく思はしめるやうである。^②

様式の年代的差異の問題は未だ明確にされない點が尠くないので、以上によつても上限を遼末らしいといふのみで、下限を明確には言ひ難く、恐らく金初位に置くべきかと推察する程度である。故に結局遼末・金

初の塔と假りに推定して大過ないかと思ふ。吾々は惜くも塔の内部へ入る機会を得なかつたが、康熙二十七年に一覽した錢良擇の「出塞紀略」などによれば、第七層内の東壁に「大金大定二年奉敕重修」と大書し、その他金元人の筆蹟が壁に多く残つてゐるといふ^③。重修なる文字は修繕の時に改築の時に用ゐられるので、その何れであるかは様式と較べて慎重に考慮すべきであるが、この塔の場合は大定二年まで降る様式と見難いやうであるから、結局大定二年（^{西紀}一六六一）の修繕だつたと解する方が穩やかだらう。

塔の現在地が遼・金の豊州の故地であることは嘗て和田教授が考證された所であり、^④現在猶ほ塔は土城趾と思はれるものゝ中に立つてゐる。豊州と言へば内蒙古西南邊の一大雄鎮であつたのだから、右に推定した年代中に塔が建てられたとしても當然のことゝ言へよう。大清一統志^{（卷一）}_{（二四）}によれば此の佛塔は大明寺にあつたもので、その大明寺は金の大定七年の建設だといふが、それでは塔の方が早く建てられ次いで寺に及んだのであらうか。單なる想像の範圍を出ないけれども普通の例から見て私は塔のみが孤立されたとするより

も、塔と共に早く寺も建てられたと考へる方が穩やかと思ひ、且つ大定七年は重建年時か、又は以前の寺の代りに大明寺なる寺が新たに建てられた年時と解すべきではなからうかと思ふ。尤も現在では塔の附近を見渡しても寺趾と思はれる一礎石さへ眼につかない情態であつたが。

要するにこの地方では創建年時が最も古く、且つ類例少ない形式の貴重な塔であるから、政府當局者の特別な愛護を切望すると同時に、今後の修補に際しては出来るだけ原様式の保存に注意を拂つて戴きたい。

① この塔の原形を推察するには興安西省白塔子の塔の寫眞が最も適當かと思ふ。その外觀は前出ボストネフ氏著に早く紹介されたが、詳細を知るには東方文化學院東京研究所報告「遼金時代ノ建築ト其佛像」圖版下冊を參照。
② 斯る細部様式を考へるに當つては、關野貞博士「支那の建築と藝術」三六四—八頁、二八二—六頁、拙稿「應縣佛宮寺の大木塔」建築學會論文集、第一三號）

③ 錢良擇「出塞紀略」借月山房彙鈔本による（康熙戊辰（二七年）五月十七日戊子……復見空城、基址頽壞、甚于昨所經者、其大相彷彿、浮屠一座、高轟天平、六角七級、純磚砌成、不用木石、外向寫作菩薩天王、面面拱立、承以蓮花、花瓣外撐數尺、因以爲簷、刻劃玲瓏、生動如眞、

全未剝落、但丹堊漫漶爾、南篆書額額、曰「萬部華嚴經塔」、每級高三丈許、階梯而登、首級有石碑八座、陷入壁間、暗不可讀、吹火照之、字體頗工、開列男婦數千百人姓名、別無隻字、誌銘中有「忠勇校尉某」・「漢兒都目某」・「女直都目某」・「通事某」、種種名色姓名、類多中華氏族、其女直姓名者、十之一爾、傍及婦人、或稱「妻某」、或稱「娘子某氏」、或稱「某娘娘」、俚俗可笑、頗似村氓所爲、其一碑、署曰「萬部華嚴經塔、看經人數、紮首比邱福州惠仁、發宏誓言、如有情數經爲看、毗盧海印定光寒、願眼恒無缺陷、諸苦惱大地衆生、俱如普賢行滿」、此外絕無紀載可考、彼地相傳、「舊有石碑、備書修建始末、以金銀鑲錯、其額爲竊盜者取去」、蓋傳聞失據久矣、上六級稍明、啓二牖以納日光、其間、或東西向、或南北向、層層相間、絕頂第七級、中空如庭、中間無物、東首壁端、大書曰「大金大定二年、奉敕重修」、不言其自何代始、以此推之、疑其創于元魏高宗以後、壁間題署甚多、大抵皆金元人遺筆、多有墨蹟如新、而語皆粗鄙、重傳其真、不敢妄易一字、備錄於後、塔內都無佛像、……

附錄華嚴塔題名

總管府判・石仲玉、至元二十年八月初一日、來遊於此
今人同古人、殘月如新月、至正十年正月二十二日、劉拱・同渾川、二婦人、同姐・鬧姐題
天堂路、大德二年五月初九日書
欽差戴聰明、四川江安縣人、元統二年四月初八日來登

尋真誤入蓬萊島、香風不動桃花老、探芝何處不歸來、白雲滿地無人掃、至治三年二月十一日書

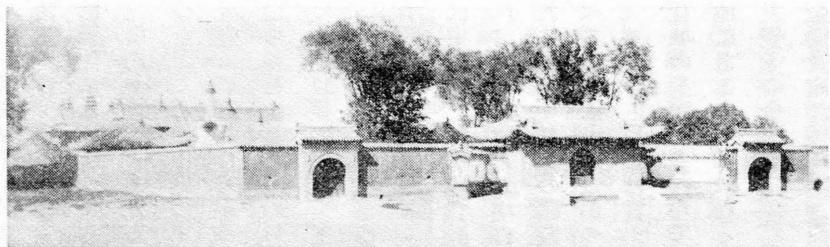
至元六年五月初三日、文山相國幕下相士三人到此
大定十八年三月十二日、關西鎮戎軍・樊典到此題
豐州在城塔、至元十一年五月、豐州管水鴿提點王英・張伯川題

大朝至元八年、西夏國仁王院僧惠善、同進・宣・冲・平順、五禪師到此記

朱朝大明國山西太原府代州崞縣儒學增廣生員段清、字希濂、嘉靖三十九年九月十五日、韃兵大舉、攻開堡塞、將一家近枝六十口殺盡、止存清一家大小五口、俯念斯文一脉、留其性命、恩人達爾漢帶回北朝、路逢房叔二人段應明・段茂先、又遇妹夫石枚・清妻陳氏・男甲午兒官名段守魯・長女雙喜兒・次女賽喜兒、陳氏於嘉靖四十年四月初一日病故、閏五月二十七日、妹夫石枚帶甲午兒、投過南朝去了、六月初八日留名、

去年曾醉海棠叢、聞說新枝發舊紅、昨夜夢迴花下飲、不知身在玉堂中、瑞伯書

私達は梯子がなくて塔内に入ることを得なかつた爲に右のやうな多くの文字の存在を確めることが出来なかつたが、石碑は確かにあるらしいから、今後の調査者の注意を喚起したいと思つて、長文ながら引用して置いたのである。なほ小方壺齋興地叢鈔所收の出塞紀略と比較すると附録以前の部分は此の方が餘程詳しい。張鵬翮の奉使俄羅斯日記に萬卷華嚴經塔とあるのは勿論誤記である



第一圖 慈燈寺全景

④ 和田清博士「豊州天徳軍の位置について」(史林十六三)

⑤ 大明寺：金大定七年建、

今毀碑、塔尙存、とある

所を見ると何によつて大

定七年としたか、怪し

く、塔内の大定二年なる

文字を七年と讀み誤つた

ことに基くかとも思ふ。

二、慈燈寺

慈燈寺はその最後方に

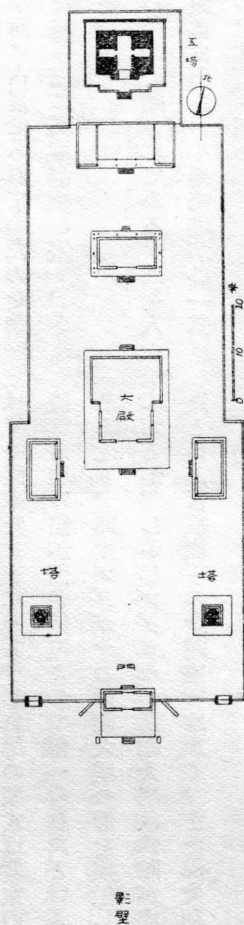
所謂五塔があつて人目を

ひくので、五塔寺といふ

方が一般に知られた名稱

である。山西通志(光緒本)

に①



第二圖 慈燈寺平面圖

慈燈寺、在崇福寺東南、有塔、基圍十丈、上岐爲

五、亦呼五塔寺、又曰新招、雍正五年建、十年賜

名

とあり、寺には石碑一つ見當らない現狀だから、これ

以上の歴史を未だ知らない。新招とも呼ばれるやうに

恐らく歸化城の喇嘛寺の中で最も新しく建てられたも

のらしく、所謂五塔を除けば建築には何等の特色なく

規模も亦大きくない。

寺は南面して山門前に廣場を設け、その南端に當り

影壁を置く。他の寺々のやうに廣場を中心にする人の

雑沓を見ず、極めて物寂しい場所である。山門の左右

の牆壁には未だに點々と銃眼と覺しき孔があけられ、

門内の庭には、縦横に濠が掘られたまゝになつてゐる

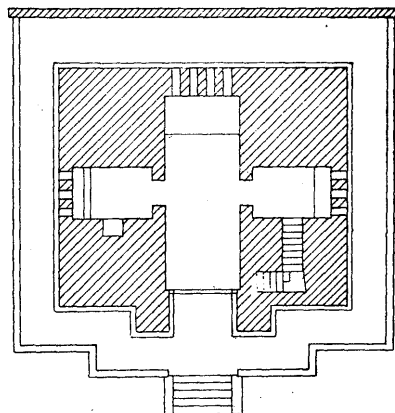
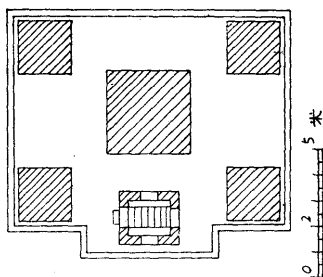
のは、事變前に此處が軍隊に占居せられてゐたのを物語るやうである。今では庭一面に夏草が生ひ繁り、寺は無住になり了つてゐた。

山門（三間、八畳を額）も左右の掖門も閉されてゐる。門を入つたところの中庭の東西には白色の小喇嘛塔が各一基宛臺上に置かれてゐるが、基壇側面の

諸彫刻をはじめ塔の形態など、總て清代中期以後の手法で見るとべき點はない。喇嘛塔の北に東西配殿、中央に十字形平面の大殿があり、それより北には中心線上に佛殿（各五間、入母廡）が二棟置かれ、次いで所謂五塔の一郭となるのであるが、これ等の諸殿の名稱を一々調べることは出来なかつた。

この寺としては言ふまでもなく、歸

化城の全喇嘛寺の中でも所謂五塔ほど興味ある建築は他にあるまい。これと同じ形式のものは北京西郊の大正覺寺の金剛寶座（所謂五塔寺）（明成化九年、西紀一四七二）と碧雲寺の金剛寶座（近年孫總理衣冠塚に改稱した）（乾隆十二年建、西紀一七四八）との二つがあり、これを雍正五年（西紀一七二七）建とすれば二十一年ほど碧雲寺のより

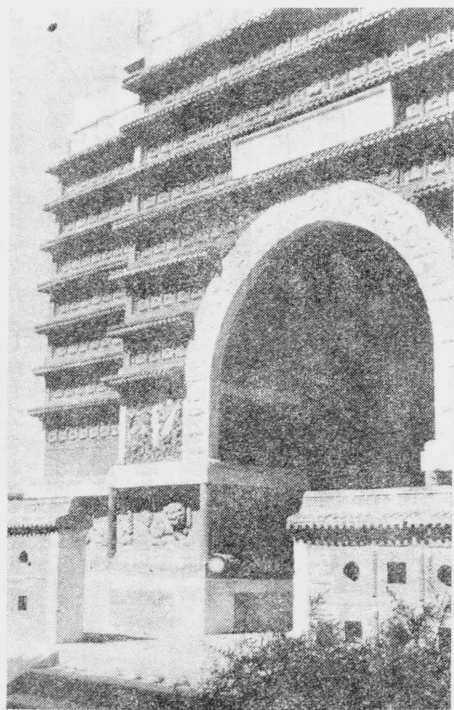


第三圖 慈燈寺金剛寶座平面圖

(上) 臺上 (下) 臺

は早く出来たことになる。これ等の型式は北京の例に於て印度の制が西蕃僧によつて傳へられたといふ話がある通り、印度ブダガヤの所謂大塔の形を模倣したのであるが、しかしブダガヤの所謂大塔は佛陀が成道したといふ菩提樹下の金剛座ではなく、また佛舍利を納

めた塔婆とも異なり、聖地に建てられた精舎であるから、嚴密に言へば塔とか金剛寶座などの名稱は適切でない。^③所がブダガヤの金剛座の上には早く殿を建て、聖跡を祀り、それが屢々修補改造されたので、其の後世に於ける精舎の形を金剛座と誤まり傳へたものらし



第四圖 慈燈寺金剛寶座入口

く、塔なる名稱も舍利の有無に拘らず廣く用ゐるに至つたやうであるから、この建築の入口上部に「金剛座舍利寶塔」と刻まれてゐるのも、敢てとがめて立てする筈もないことと思ふ。尤も私は塔婆と區別するため「所謂五塔」などと所謂なる文字をつけて書くのであるが。

慈燈寺の所謂五塔の形は大正覺寺のそれに比較적으로似た點が多く、碧雲寺のものは全形は似てゐても細部に於てかなりの相違を示してゐる。しかし年代の差

は争ひ難く、表面浮彫の技巧は大正覺寺のものが最も優れ、慈燈寺のそれが著しく劣つて見えるのは致し方もない。言ふまでもなく總て石造であるが、北京の二例が白大理石であるのに對し、これは赤褐色の凝灰岩質の石であり、必要な部分には顔料を塗つてゐる。

全形は矩形臺上に五つの多層塔と階段屋根とを載せたものであるが、この場合は臺の幅約十一米、奥行九米五、高さ七米（更に周圍の欄干の高五體）、中央が方形七層塔で最も高く、四隅が方形五層塔、高さ約七米に及び、各層塔の上には相輪の代りに夫々小喇嘛塔を載せる。臺の側面は上部の多層塔の側面と同様に、屋根形の突出をつけて七層としその各層に小佛像を無數に浮彫りしてゐる。而して臺の最下に更に基壇を意味する層を設けて獅子などの浮彫を施した手法は、大正覺寺の金剛寶座と多少趣きを異にした點がある。臺の正面中央に大アーチを設け、^④矩形の輪郭の平面内に十字形の室をとり、室内から臺上に上る階段をつける取り扱ひにも、大正覺寺のそれ

と異なつた點が見出せるが、しかし大まかに言へば總ての例がブダガヤの所謂大塔に大略似通つた計畫であるのは興味深い事實であつて、如何なる圖式によつて傳播されたかゞ注意すべき問題になると思ふ。

臺の東西南の三方には牆壁が繞ぐられ、北には一種の影壁が高く築かれて、その北は街路に面してゐる。影壁の南(即ち内)側、つまり所謂五塔に面する側には喇嘛教的題目と思はれる構圖の浮彫ある石板を三個はめてゐる。略々同形の壁畫が次に述べる延壽寺でも見られたが、喇嘛教についての知識の浅い私には其等の意味の説明が未だ出来かねるのは残念である。

① 綏乗 卷八、古蹟考 は殆んどこれと同文。

② 帝京景物略(崇禎八年撰)卷五 眞覺寺の條に「成祖文皇帝時、西番板的達、來貢……金剛寶座規式、成化九年、詔寺準中印度式、建寶塔」とあるが宸垣識略卷二四などになると西域中印度僧板的達……詔寺準中印度式……となつて、西蕃を中印度と解してゐる。關野貞博士「大正覺寺金剛寶塔」(支那の建築と藝術三三四頁)には西番(西藏ならん)とある。

③ これが佛塔でなく精舎であることは早くから言はれたことで、手近かの例をとれば J. Fergusson, History of Indian and Eastern Architecture, (revised ed.) Vol. I, p.

362 があり、日本では小野玄妙博士「佛教美術及歴史」(大正五年刊)五五頁の如きがそれだが、後にこれだけを扱つたのは足立康博士「佛陀伽耶大塔非塔婆論」(史學雜誌四〇、四五六)であらう。尙ほ足立喜六氏「考證法顯傳」一九六一二〇一頁にも此處の僧伽藍、金剛座の解説が見える。

④ 此のアーチ石の表面のガルダがナীগを押へたのや其他の構圖は大正覺寺の場合に似てゐるのみでなく、居庸關の腰折アーチにも似た所が多いのは、元代以來の喇嘛教美術の流れを見る上に面白いと思ふ。

⑤ 臺の部分の内部の室は總て一樣とは言へない。臺の平面もブダガヤ、大正覺寺の二例は正しい矩形で奥行が深いのに、これは凸形矩形で横幅の方が廣い。臺上の五塔もブダガヤと支那の場合では大さや形や、中央と隅との塔の比例など随分違ふ。細かく見れば種々差異は眼につくが或は其の差異によつて系統など暗示されるところがあるのかも知れない。

三、延壽寺

延壽寺については綏乗(卷八、古蹟考)の記載が最も要を得てゐるやうだから先づそれを挙げよう。

在無量寺東百餘步、俗名西時圖招(今一名舍、利圖招)、清康熙三十五年西征駐蹕、適值西時圖呼克圖重修舊寺工竣、賜名延壽、並有御製碑文、雍正四年、以西時圖

呼圖克圖居住、嘉慶二十三年補授札薩克達喇嘛掌印、咸豐九年重修殿基增高數尺、有藏經塔一、壯麗爲諸寺冠

この康熙三十五年に於ける重修と延壽なる寺名を帝より賜はつたことについては、現に滿漢蒙藏の文章を以てした二基の石碑が東西の碑亭に立ち、その漢字碑文に「城南舊有佛刹喇嘛席勒圖、葺而新之、奏請寺額、

①因賜名延壽寺」などと

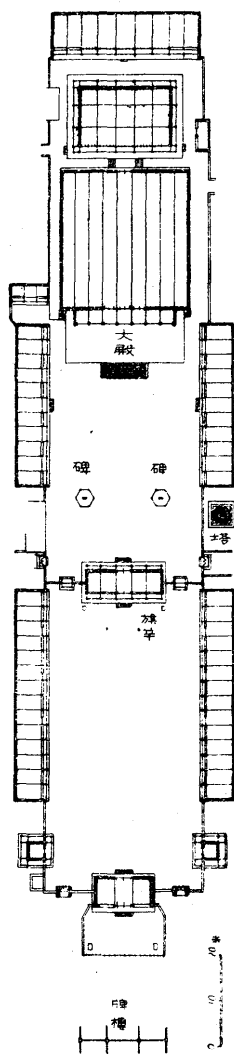
あるのでも知られる。

寺の規模は極めて大

きく、他の寺に比べて修繕が行き届いてゐる。

諸建築の配置は縦に細長く中央部と左右兩部との三部に區劃されてゐるが、その中で私が見たのは主要建築の集まつてゐる中央部のみで、左右の部分は閉された所が多く一覽する便宜を得なかつた。先づ前方の雑沓する廣場に三間の大牌樓を置き、次に山門(門三)（又は天王殿イ）があるが、こゝは柵を繞ぐらして通行が

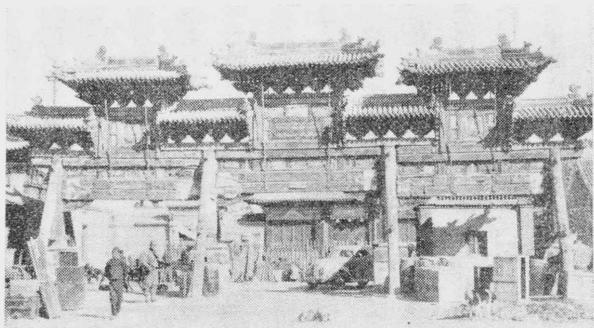
出來ず、寺への出入は全く左右の掖門によつてゐる。掖門を入れれば東に鐘樓(方三間)、西に鼓樓その北に東西廊廡(各十間)が續き、廊廡の終る邊の中央に五楹の殿があり、陰山古刹(雍正甲辰二年、即乾隆甲辰三十年、重修)の匾額を擧げてゐる。これより更に北に進めば東西に各一の碑亭(各六)があり、東の碑亭の更に東に一基の喇嘛塔を置くのは、最初に記した綏乗に見える藏經塔なるものであらう。



第五圖 延壽寺平面圖

次で長い東西廊(各十間)、さうして中央に非支那的（西藏的）色彩の極めて強い大殿が建つ。

大殿は前殿と後殿とより成るが、後殿が支那的屋根を持つのに對し、前殿は全く陸屋根にして屋上が祭儀の際に利用せられ、外壁の裝飾、軒上の宗教的飾りなど全く非支那的で、西藏的喇嘛教の表現は近年新たにしたらしい強い彩色と相ひまつて、極めて強い印象

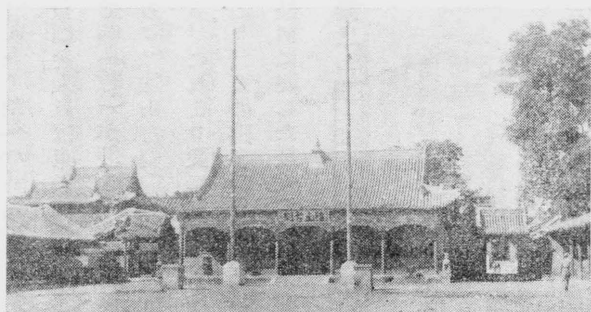


第六圖 延壽寺牌樓

したとあるのは此の殿を主に指すのではないかと思ふ。若しさうだとすれば此の殿も亦咸豐九年(西曆一八五九)に新建又は根本的改造をされたものかと想像する。

大殿の後方には同じく高い基壇上に七楹殿、及び九楹殿があるが、何れも支那風の建築で殆んど注意を牽く所はなかつた。要するに建築的には大殿の中の前半

を與へる。この點では恐らく歸化城の諸寺中、最も見るべき建築であらう。細部では前面の角柱の柱頭附近とその上の持ち送り、角柱が三重である點、喇嘛教的壁畫及び壁面文様など、皆甚だ興味深い。綏乗に咸豐九年に重修して殿基の高さを數尺増



第七圖 延壽寺佛殿(陰山古刹の額あり)

と喇嘛塔一基とが眞に喇嘛教としての特色を發揮してゐるのみで、その他には規模の大と整然たる所とを採る位に過ぎず、餘り見るに足る點はなかつた。

① 此の碑文は何かに出てゐると思ふが、左に全文を掲げる。『は行の終。朕の字の上には二字分の空きがある。

朕惟、歸化城爲古豐州地、山環水互、夙稱勝境、城南舊有佛刹喇嘛席勒圖、葺而新之、奏請寺額、因賜名延

壽寺、丙子冬 朕以征厄魯特、噶爾丹、師次歸化城、曾臨幸茲寺、見其殿宇弘麗・法相莊嚴、命懸設寶旛、並以經典念珠、賜喇嘛席勒圖、令焚修勿懈、夫朕之親有事於塞外、非無故也、往者厄魯特與喀爾喀、交惡相攻、朕憫念生民塗炭、遣使諭解、而噶爾丹追擊喀爾喀」竟入掠納爲朱穆泰、命和碩裕親王、聲討大敗賊於烏蘭布通、時葛爾丹盟誓佛前永不入犯、乃班師而還、後

葛爾丹蔑棄誓言、復掠納木查爾拖音於克魯倫之地、丙子春、朕復駐師鄂爾多斯、勦撫並用□厄魯特人衆、絡繹歸命、而噶爾丹仍未嚮順、丁丑率師駐狼居胥山麓、官兵分道並進、噶爾丹計窮自斃、子女就獲、餘黨悉平、方今中外恬熙、邊境生靈咸得晏然安堵、喇嘛席勒圖請建碑、垂示」永久、因書此勒石、俾後之賢者、知朕不憚寒暑、三臨絕塞、爲民除殘之意、時

康熙四十二年歲次癸未 月

尙ほ近くの崇福寺にも同年の石碑があり、殆んど同文であるが只、寺名の邊だけが次のやうに違つてゐる。

(前文同じ) 城南舊有佛刹喇嘛拖音、葺而新之、奏請寺額、因賜名崇福寺、丙子冬、朕以征厄魯特・葛爾丹、師」次歸化城、於寺前駐蹕、見其殿宇弘麗法相莊嚴、命懸設寶旛、並以 朕所御甲冑・弓矢・橐鞭、留置寺中……………

山西通志光緒本、卷五七に康熙十五年、西征駐蹕時……………とあるのは、三十五年とすべきであることが右の碑文によつても明かである。

附記

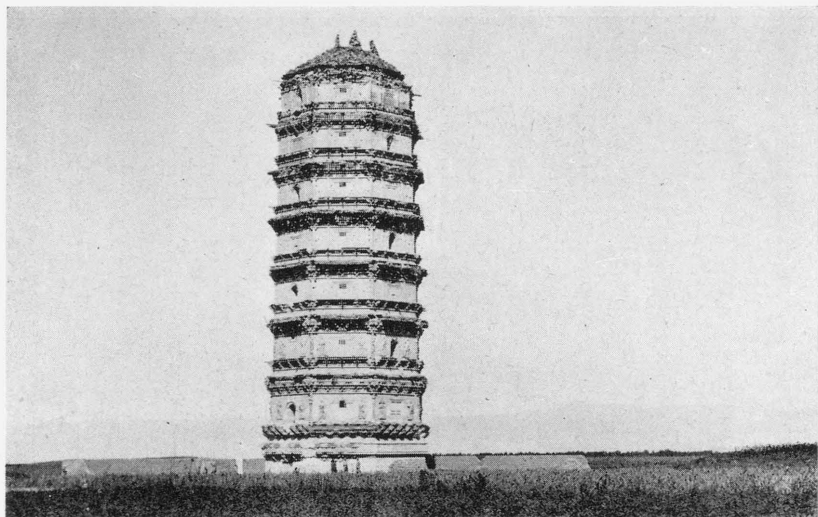
この旅行は日本學術振興會の補助による。謹んで感謝の意を表したい。

×

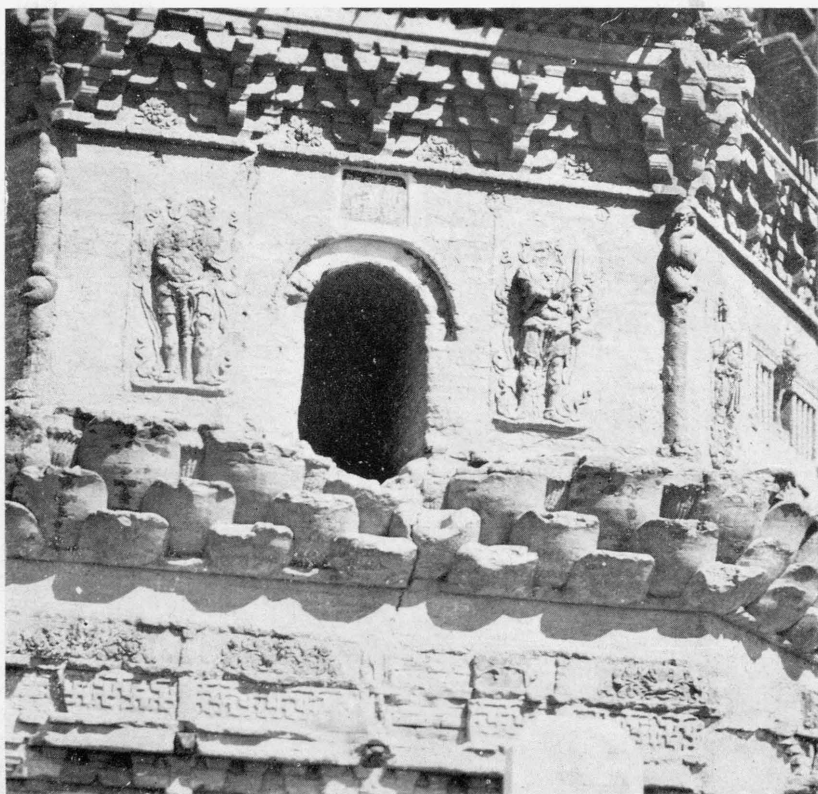
×

×

×

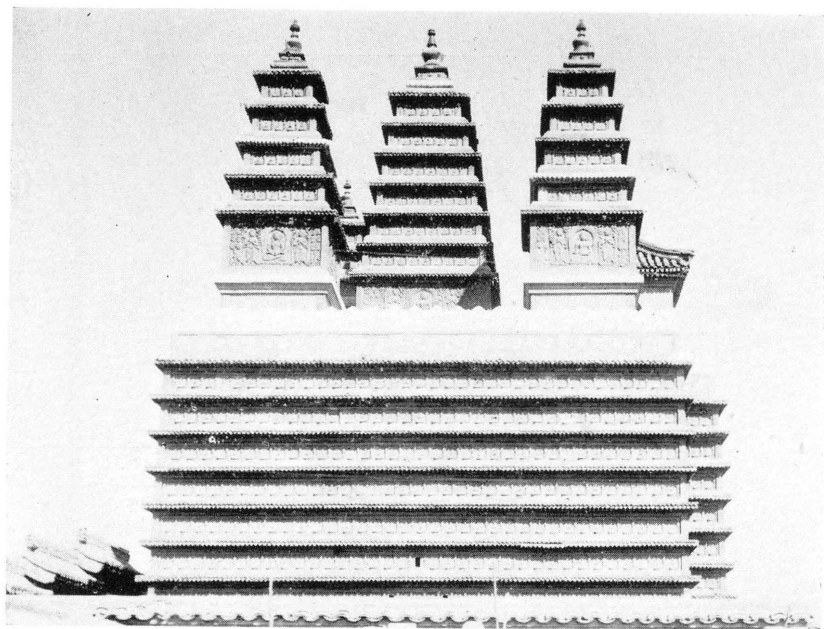


萬部華嚴經塔（東南より見たる全景）

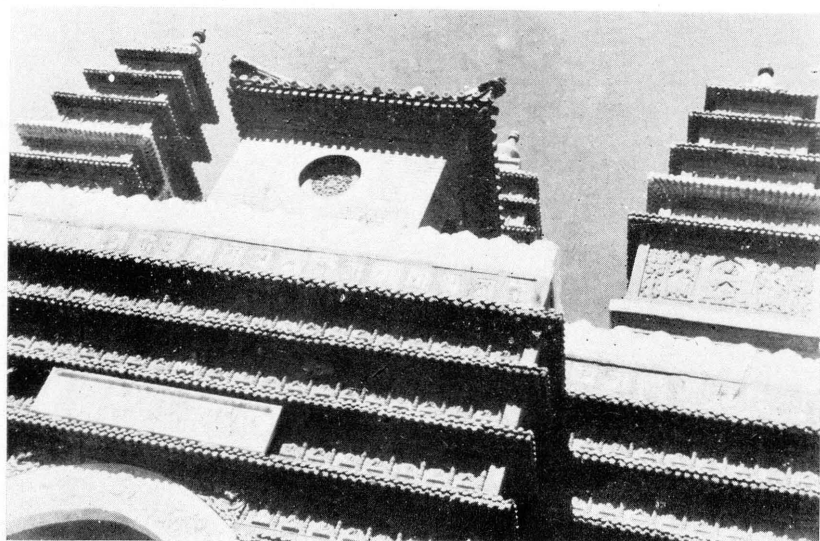


同上、初層と基壇上部（南側）

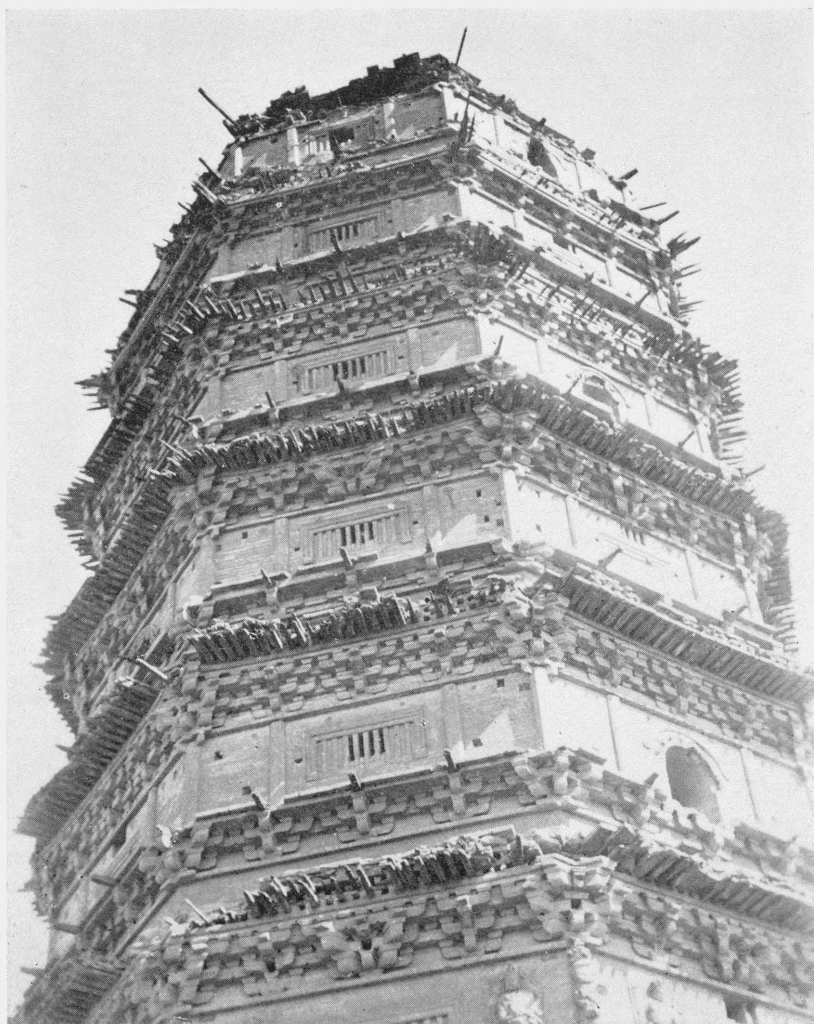
厚和の慈燈寺金剛寶座（西側より）



同上細部（南側より）

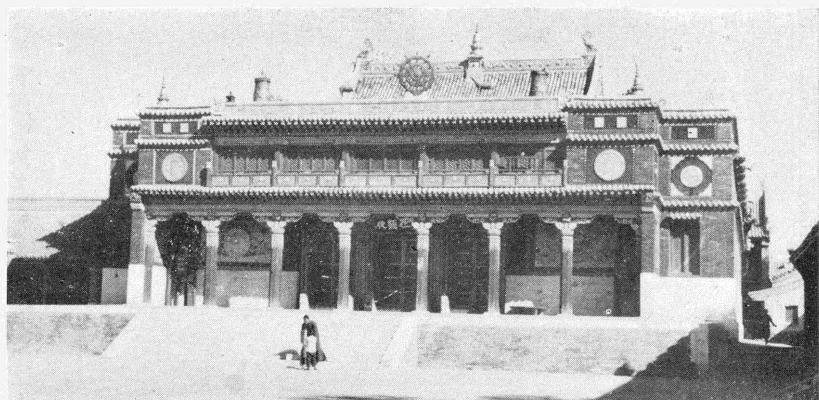


萬部華嚴經塔（西南側より、第二層以上）

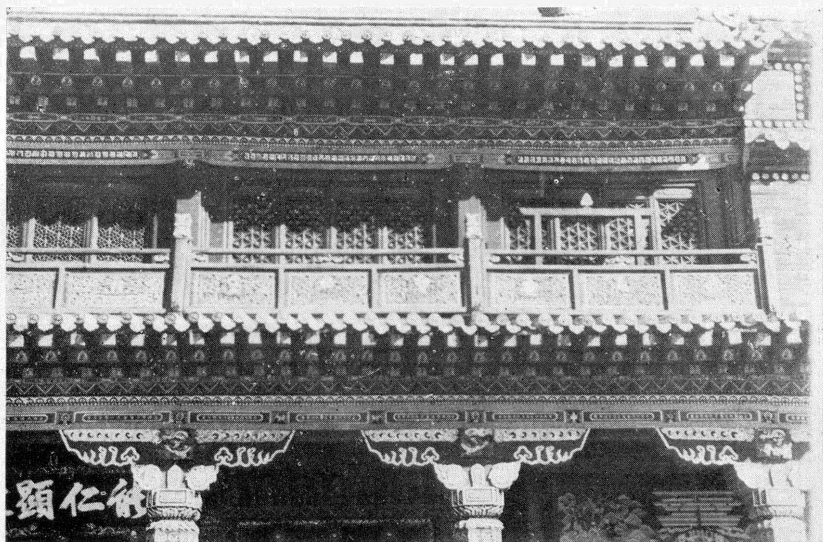


同上基壇高欄





厚和の延壽寺大殿



同上細部